

【論文】

曖昧さへの態度に関する研究 —曖昧な状況への対処に着目して—

中嶋 史織 (大崎市民病院)

奥野 雅子 (岩手大学人文社会科学部)

I. はじめに

日常生活には、白黒はっきりしない曖昧な状況が多く存在する。例えば、相手が自分に好意的か敵対的か分からない場合や、試験の結果が分かるまでの間などがあげられる。これまで、曖昧さに耐えられないことが心理的不適応につながる事が多くの研究で示唆されている(増田, 1998; 吉川, 1986; 友野・橋本, 2005)。曖昧さは多くの人にとってストレスとなることが考えられ、曖昧さを受け入れることは簡単ではない。しかし、曖昧さに耐えられない場合でも曖昧さへの対処によっては感情が変化することが考えられる。また、対処によって曖昧さが減少することも考えられる。よって、曖昧さを受け入れられるような捉え方に変化させるのではなく、対処を変えることで個人の適応感が変化する可能性はないだろうか。そこで、本研究では曖昧な状況への寛容及び曖昧さへの態度について検討する。さらに、曖昧な状況への対処や適応感との関連について検討することを目的とする。

II. 問題と目的

1. 曖昧さとは

曖昧さとは、Budner(1962)により、「十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態」と定義され、新奇性(手がかりが全くない状況)、複雑性(手がかりがたくさんありすぎる複雑な状況)、不可解性(手がかりが異なった事態を招くような矛盾した状況)の3つに分類される。また、Norton(1975)は、曖昧さを扱った論文から曖昧さの使用例を分析し、曖昧さの性質を「多義性」、「漠然性・不完全性・断片的」、「確率的」、「非構造的」、「情報の欠如」、「不確実性」、「非一貫性・矛盾・逆説的」、「不明瞭性」の8つに分類している。

このような曖昧さの定義から鑑みるに、曖昧さは事態の正確な予測が不可能になり、不都合な状況からの回避やコントロールが困難になることから、一般的には不快なものであると考えられている(増田, 1998)。Janis(1971)は医療現場で生じる曖昧さに着目し、手術を受ける患者の反応に関する研究をまとめている。それによると、起こる可能性のあるさまざまな苦痛に対して正確な情報を与えられた患者は、手術に伴う曖昧さが減少し、術後に情緒障害を見せることが少ないと報告している。これを受け、増田(1998)は、曖昧さはそれ自体がストレスとなるのであり、曖昧さの減少によってストレス反応が軽減すると述べている。このように、曖昧さは多くの人にとってストレスとなるものと考えられる。

2. 曖昧さへの寛容／非寛容について

これまで、曖昧さに対する個人の態度は *Tolerance of Ambiguity* と表現され、日本における研究では *tolerance* という単語が寛容や耐性と訳されてきた。そして、曖昧さに寛容であるか非寛容であるか、耐性があるかないかといった 1 次元で捉えられてきた。その中でも西村(2007)は、曖昧な場面や状況に耐えられないことに焦点が当てられてきたことを指摘している。特に、Budner(1962)は、曖昧さへの非寛容を「曖昧な状況を恐怖の源泉として知覚する傾向」と定義し、曖昧さへの耐えられなさとして扱った。曖昧さへの耐性が低い者は、高い者より、生活事件の脅威を高く感じる傾向にあり(増田,1998)、曖昧さに非寛容な者は、情緒不安定さと不適応、衝動的行動傾向といった特徴が認められる(吉川,1986)。さらに、友人関係における曖昧さに非寛容な者は対人関係ストレス状況に置かれると、そのストレスから一刻も早く脱却するために白か黒かの解決を図り、対人関係を崩壊させるコーピングを行うことでストレス反応を高めることも明らかとなっている(友野,2010)。このように、曖昧さに非寛容であることは不適応的であることが多くの研究により示されている。

反対に、曖昧さへの寛容は、Budner(1962)によって「曖昧な状況を好ましいものとして知覚する傾向」と定義されている。吉川(1986)は、曖昧さに *tolerant* な人は、*intolerant* な人と比較し、自己・他者・社会への肯定的な評価感情が高いことや自律神経系が安定していることを示している。また、曖昧性耐性が高い者が低い者に比べ、潜在的な異質性への恐れが無さを示す指標である異質耐性が高いことも示されている(植村,2001)。このように、曖昧さに寛容であることが適応的であることが多くの研究により示されてきた。しかし、曖昧さへの耐性が高い、もしくは高すぎることは、曖昧さを減少させる動機が欠如し、曖昧さに対して実際的な行動がとれないこと(吉川,1980)、曖昧さに寛容すぎると不確かな状況にとどまることに満足し、不確かさを解決することや新しい情報を手に入れる機会を避けてしまう可能性も指摘されている(Litman,2010)。このように、曖昧さへの寛容が曖昧さに対する実際的な対処や新たな行動を抑制する可能性から、曖昧さに寛容であることが必ずしも適応的とは言い切れないと考える。

3. 曖昧さへの態度に関する研究について

曖昧さへの態度に関するこれまでの研究では、曖昧さへの態度が寛容か非寛容かの一次元で捉えられ、その特性や適応との関連が述べられてきた。しかし、曖昧さへの寛容を非寛容の対極としてのみ処理するのではなく、多面的に取り扱う必要がある。曖昧さに対して脅威と感じずに受け入れられることと、好んで関わるのが混同されていることが指摘されている(吉川,1986 ; 西村, 2007)。このため、西村(2007)は、曖昧さへの態度を多側面から測定する尺度の作成を行い、適応との関連を検討している。その結果、曖昧さへの態度の中でも曖昧さへの不安や統制が強迫傾向と関連するということが、曖昧さへの不安と抑うつ傾向との関連が強いことが示唆された。しかし、曖昧さに不安を感じるということが、問題を試練や学びの機会とポジティブに捉えることにつながる可能性が示されている(中嶋・奥野,2020)。つまり、曖昧な状況に不安になることは、その状況を試練や学びの機会と捉えられる可能性が考えられる。一方、米田(2012)は曖昧さを受け入れられる者は曖昧な状況に置かれても、その状況がどれほど曖昧であるか精査し区別できると考察している。

本研究では、曖昧さに対する耐えられなさの他にも、多面的な態度を想定し、多次元的

な曖昧さへの態度を測定できる西村(2007)の尺度を用いて、曖昧さへの態度が曖昧な状況への対処や適応感にどのような影響を与えるかを検討する。また、この曖昧さへの態度尺度は、場面の特定性を排除し、全般的な曖昧さへの反応傾向を測定することを目的として作成されている(西村, 2007)。しかし、曖昧さへの態度は、その曖昧な状況が具体的にどのようなものであるかによって変化する可能性がある。そして、それぞれの状況に対しどれほど曖昧さに寛容でいられるかが自身の全般的な曖昧さへの態度の認識につながると考える。つまり、西村(2007)の尺度で測定される曖昧さへの態度は、個人が有する特性といえるが、個人が日常生活の中で遭遇する具体的な曖昧状況への寛容さが、この特性に寄与することが予想できる。

4. 曖昧な状況に対する認知行動療法と家族療法の両眼視

認知行動療法では、「認知」・「感情」・「行動」・「生理」はひとつの統一システムを成し(Curwen, Palmer & Ruddell, 2000)、これらの要素の1つに変化が起ると、ほかの要素にも変化をもたらされると考える(Neenan & Dryden, 2004)。よって、曖昧な状況に対する認知が感情に影響し、それが行動や身体の生理状態にも変化をもたらすと考えられる。これら4つが相互影響することを想定し、本研究では、曖昧さに対する認知や感情、行動について整理する。

また、家族療法の理論的基盤として、「コミュニケーション理論(Watzlawick, Bavelas, & Jackson, 1967)」がある。そこでは、行動は他者との相互作用によって規定され、5つの公理が示されている。その中で、コミュニケーション理論の第1公理「すべての行動はコミュニケーションである。コミュニケーションしないことはできない」が提示されている。本研究ではこれを援用し、曖昧な状況に対して対処しないというコミュニケーション行動も対処であると考えられる。

5. 本研究の目的

以上より、曖昧さは多くの人にとってストレスとなること(増田, 1998; 田尾, 1989)、その曖昧さに対し非寛容であることが不適応に(増田, 1998; 吉川, 1986)、寛容であることが適応につながることを示されてきた(吉川, 1986; 植村, 2001)。しかし、曖昧さに寛容であることの不適応的な側面も指摘されており、寛容であることが一概に適応的であるとはいえない。加えて、曖昧さに対する態度を変化させることは容易ではない。適応感を高めるうえでは、曖昧さへの寛容/非寛容といった態度の変化よりも、曖昧さへの対処に焦点を当てる方がより実際的であるといえる。しかし、どのような態度が対処行動につながり、どのような行動が適応感を導くのかは明らかにされていない。さらに、その対処行動は曖昧さへの態度によっても変化することが考えられ、態度を無視して行動のみを考えることはできない。また、曖昧さへの態度は具体的な曖昧状況への寛容さに影響を受けると考えられる。そこで、本研究では、曖昧な状況と曖昧な状況への対処のあり方を整理し、曖昧な状況への寛容から曖昧さへの態度へ及ぼす影響、そして、曖昧さへの態度から対処へ、対処から適応感に及ぼす影響について仮説モデルを用いて検討することを目的とする。仮説モデルを Figure1 に示す。



Figure1. 仮説モデル

III. 方法

本研究では、曖昧な状況への許容と曖昧な状況への対処についての質問項目が必要であったため、予備調査を実施した。

予備調査

調査時期と調査対象者 2018年7月に大学生50名(有効回答数50名、男性23名、女性27名、 $M=20.88$ 、 $SD=0.97$)を対象として予備調査を実施した。

手続き 曖昧だと感じる状況と曖昧だと感じる状況への対処について「あなたが曖昧だと感じる状況を3つあげてください。また、その状況に対しどのような対処をするかお答えください。」と教示し、自由記述による回答を求めた。

分析 得られた回答をKJ法(川喜田, 1986)で分類し、質問項目を作成した。

本調査

調査時期と調査対象者 2018年11月に大学生201名(有効回答数196名、男性83名、女性113名、 $M=19.3$ 、 $SD=1.31$)を対象として本調査を実施した。

手続き 大学の講義時間の一部を利用して質問紙を配布し、回答は統計的に処理し個人は特定されないこと、調査結果は研究目的以外には使用しないことなどを説明し承諾を得て実施した。

質問紙の構成 フェイスシート(性別、年齢)、曖昧な状況への寛容についての質問、曖昧さへの態度尺度(西村, 2007)、曖昧な状況への対処についての質問、大学生用適応感尺度(大久保・青柳, 2003)によって構成された。曖昧な状況への寛容についての質問項目は、予備調査から作成した26の曖昧な状況それぞれについて「どの程度許容できますか」と尋ね、「全くできない(1点)」から「非常にできる(6点)」の6件法で回答を求めた。曖昧さへの態度尺度(西村, 2007)は、曖昧さへの態度を測定する26項目で構成され、「享受」「不安」「受容」「統制」「排除」の5因子から成る。「次の各項目はあなたの考え方にどの程度あてはまりますか。」と尋ね、「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(6点)」の6件法で回答を求めた。曖昧な状況への対処についての質問項目は、予備調査から作成した曖昧な状況に対しての対処の内容を測る30項目で構成され、曖昧な状況に置かれた場合に、「あなたはどのように対処しますか。」と尋ね、「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(6点)」の6件法で回答を求めた。大学生用適応感尺度(大久保・青柳, 2003)は、「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「課題・目的の存在」「拒絶感の無さ」の4因子、29項目で構成され、「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(6点)」の6件法で回答を求めた。

分析 曖昧な状況への寛容と曖昧な状況への対処について探索的因子分析を行い、因子を抽出した。その後、曖昧な状況への寛容を説明変数、曖昧さへの態度を目的変数として、また曖昧さへの態度を説明変数、曖昧な状況への対処を目的変数として、また曖昧な状況への対処を説明変数、大学生用適応感尺度を目的変数としてステップワイズ法により重回帰

分析を行った。これらの結果を予測として、曖昧な状況への許容、曖昧さへの態度、曖昧な状況への対処、適応感の4つの観点から、共分散構造分析によりモデルの構造を試みた。

IV. 結果

曖昧な状況への寛容の因子抽出

曖昧な状況への寛容の質問項目について、天井果がみられた2項目を除いた24項目に対して、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.30以上を示さなかった項目と複数因子に高い負荷量を示した項目を分析から除外し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を繰り返し行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子相関をTable1に示す。

第1因子を「返答待ち」、第2因子を「取り組み方への迷い」、第3因子を「理解困難」、第4因子を「未知の状況」と命名した。クロンバックの α 係数は、第1因子から第4因子にかけて.724、.747、.653、.530であった。

Table1. 曖昧な状況への寛容の因子分析
(最尤法・プロマックス回転)

項目	因子			
	F1	F2	F3	F4
返答待ち $\alpha = .724$				
LINEの返信がなかなか返ってこないとき	.985	-.022	-.040	.086
メールの返信がなかなか返ってこないとき	.901	-.005	.028	-.022
面接の結果を待つ間	.310	.261	.098	-.067
取り組み方への迷い $\alpha = .747$				
レポートをどのような構成で書けばよいかわからないとき	.020	.933	-.030	.010
授業やゼミでの発表までに何をどのように進めればよいかわからないとき	-.085	.831	-.018	.023
話し合いの場で自分の意見を言うべきか言わないほうがよいかわからないとき	.138	.362	.077	.117
理解困難 $\alpha = .653$				
授業の内容が理解できないとき	-.041	.086	.786	-.032
相手が話している内容と自分が理解していることが合っているかわからないとき	.112	.019	.621	-.177
解けそうで解けない問題があるとき	-.098	-.046	.511	.247
自分が買おうとしているものが本当に必要かわからないとき	.025	-.165	.330	.239
未知の状況 $\alpha = .530$				
行ったことのない場所に集合するとき	-.061	.060	-.009	.749
初対面の人と会うとき	.133	-.004	-.045	.529
バイトやサークルにおいて、先輩に不明な点を質問したが、「自己判断に任せる」と言われたとき	.009	.194	-.005	.305
因子間相関	I	II	III	IV
	I	.090	.102	.198
	II		.342	.204
	III			.365
	IV			

曖昧な状況への対処の因子抽出

曖昧な状況への対処の質問項目について、床効果がみられた1項目を除いた29項目に対して、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.35以上を示さなかった項目と複数因子に高い負荷量を示した項目を分析から除外し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を繰り返し行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子相関をTable2に示す。

第1因子を「放置」、第2因子を「周囲観察」、第3因子を「探索的行動化」、第4因子を「情報収集」、第5因子を「準備行動」と命名した。クロンバックの α 係数は、第1因子から第4因子にかけて、.796、.812、.648、.622、.518であった。また、各尺度の下位尺度の平均値と標準偏差とTable3に示した。

Table2. 曖昧な状況への対処の因子分析
(最尤法・プロマックス回転)

項目	因子				
	F1	F2	F3	F4	F5
放置 $\alpha = .796$					
矛盾していることや不確かなことは放っておく	.807	-.041	.089	.009	.023
矛盾していることや不確かなことは考えないようにする	.725	-.167	.183	-.087	.120
何をどのような順序で進めればよいか分からないときはあきらめる	.684	.071	.036	-.042	-.047
情報が多すぎて迷うときは、そのまましておく	.633	-.021	-.146	.042	-.034
自分がどのように動いてよいか分からない状況では、何もしない	.531	.142	-.241	.106	-.181
周囲観察 $\alpha = .812$					
情報が足りず、はっきりしない状況では、周りの反応を見る	-.015	.905	-.055	-.095	.018
自分がどのようにふるまえばよいか分からないときは、周囲の状況をうかがう	.047	.877	.027	-.085	-.049
自分がどのように動いてよいか分からないときは、周りの人に聞く	-.181	.542	.089	.035	-.086
友達が何を考えているのか分からないときは、相手の出方を見て行動する	.101	.537	-.004	.214	.130
指示されたことや説明が不確かなときは、状況を見てから行動する	.045	.471	.062	.180	.189
探索的行動化 $\alpha = .648$					
情報が足りないときは、とりあえず行動する	-.185	.079	.931	.021	-.100
新しいことをするときは、考える前に行動に移す	.273	.013	.492	.117	-.164
課題や試験勉強をどのように進めてよいか分からないときは、まずやってみる	.031	-.023	.481	-.028	.216
情報収集 $\alpha = .622$					
人によって違うことを説明されたときは、自分で情報を集める	-.012	-.015	.096	.755	.019
はっきりしないことや、不明なことがあるときは、自分で確認する	.077	.005	.048	.669	.023
はっきりしない状況や一貫していないことがあるときは、情報を求める	-.089	.029	-.047	.408	-.043
準備行動 $\alpha = .518$					
今後の予定がわからないときは、いろいろな状況を考えてから行動する	-.026	.172	-.006	-.101	.651
授業やゼミで何かわからないことがあれば、そのことについて調べる	-.125	-.185	-.083	.171	.530
時刻通りに物事が進まないときは、様子を見る	.233	.008	.074	-.156	.401
初めての場所に行ったり、初対面の人と関わるときは、できる準備をする	-.052	.058	-.099	.191	.353
因子間相関	I	II	III	IV	V
I		.196	.040	-.158	.068
II			-.086	.423	.217
III				.103	.269
IV					.272
V					

曖昧な状況への許容、曖昧さへの態度、曖昧な状況への対処、適応感の関連モデルの構成

Amos を用いて共分散構造分析を行い、曖昧な状況への寛容、曖昧さへの態度、曖昧な状況への対処、適応感の関連モデルの構成を試みた。分析に際し、前述した重回帰分析の結果を予測としてモデルの構成を行った。得られたモデルを Figure 2 に示す。まず、重回帰分析において影響が見られた変数同士にパスを引いた。しかし、重回帰分析の結果を反映させただけでは十分な適合度を示さなかったため、モデルの再検討を行った。曖昧さへの態度のうち「統制」と、適応感のうち「課題・目的の存在」をモデルから削除した。

さらに、曖昧さへの態度のうち「受容」と「享受」は曖昧さを受け止める態度という共通点が考えられるため、『曖昧さの受け止め』という潜在因子を設定した。また、曖昧な状況へ

Table3.

各尺度の下位尺度の平均値および標準偏差

	平均 標準偏差	
	平均	標準偏差
曖昧な状況への寛容		
返答待ち	4.43	0.96
取り組み方の迷い	3.25	0.89
理解困難	3.35	0.78
未知の状況	4.03	0.86
曖昧な状況への対処		
放置	3.17	0.85
周囲観察	4.73	0.7
探索的行動化	3.65	0.91
情報収集	4.4	0.7
準備行動	4.19	0.68

の対処のうち、「周囲観察」「準備行動」「情報収集」の3つにおいても、直接的な対処ではなく、間接的な曖昧さへの対処として共通していると考えられるため、『間接的アプローチ』として潜在因子を設定した。加えて、適応感のうち、「被信頼・受容感」「居心地の良さの感覚」の2つも、潜在因子として『適応感』と設定した。そのうえで再度分析を行ったが適合度は十分な結果を示さなかった。再び、モデルについて検討した結果、曖昧な状況への寛容のうち「理解困難」をモデルから削除した。その結果、適合度が上昇し十分な値を示したため分析は終了とした。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(39)=56.819(p=.032)$ 、GFI=.952、AGFI=.919、CFI=.959、RMSEA=.048、AIC=110.819であった。「適応感」は「被信頼・受容感」と「居心地の良さの感覚」から構成され、「間接的アプローチ」から正の寄与がみられた。「間接的アプローチ」は「周囲観察」「準備行動」「情報収集」から構成され、「曖昧さの受け止め」から正の寄与がみられた。「曖昧さの受け止め」は「享受」と「受容」から構成される。

V. 考察

曖昧な状況への寛容について

曖昧な状況への寛容については、「返答待ち」「取り組み方への迷い」「理解困難」「未知の状況」の許容が4つの特徴として見いだされた。

「返答待ち」への寛容は、相手とのやり取りの中で生まれる曖昧さへの寛容さが反映されている。人とのやり取りというのは、どんな答えが返ってくるか、相手がどんなことを感じ

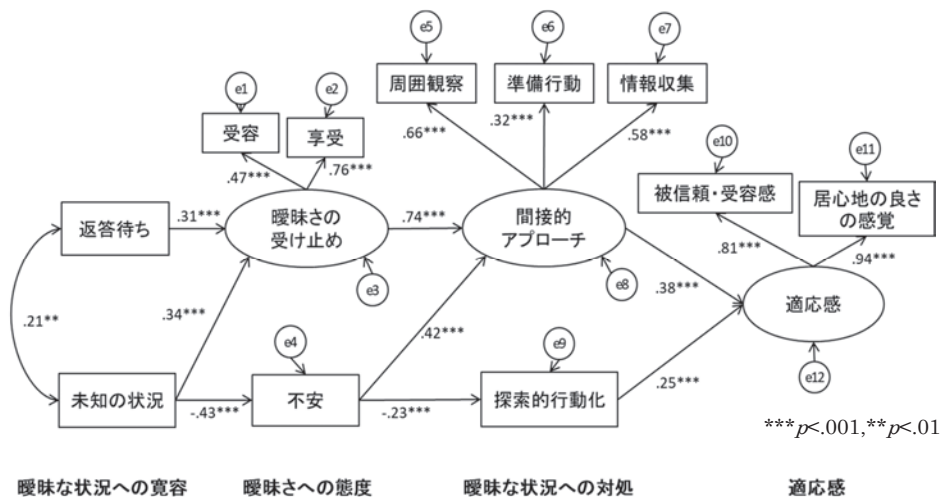


Figure2. 曖昧な状況への寛容、曖昧さへの態度、曖昧な状況への対処、適応感の関連モデル

ているかなどの正確な予測ができず、確実なものではない。Norton(1975)は、曖昧さを8つに分類しているが、その中の「不確実性」を伴った状況であると考えられる。さらに、返信が返ってこないということは、相手からの情報がないという点で、「情報の欠如」といった特徴も持ち合わせているといえる。

「取り組み方への迷い」への寛容は、見通しの立たなさや物事の進め方への戸惑いに対する寛容さであると考えられる。これは、Budner(1962)による定義の「十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態」と重なる部分がある。さらに、Norton(1975)の分類の「非構造的」とも一致する部分である。

「理解困難」への寛容は、物事に対する分からなさへの寛容さと考えられる。これは、手がかりの複雑さや手がかりの矛盾によって引き起こされる場合や、Norton(1975)の分類の「情報の欠如」のように情報が足りないことによっても引き起こされることが考えられる。「未知の状況」の寛容は、新しい状況への寛容さといえ、Budner(1962)の分類である「新奇性」「複雑性」「不可解性」のうち「新奇性」に相当するものと考えられる。つまり、手がかりがなく新しい状況である。

このように、本研究で見いだされた「返答待ち」「取り組み方への迷い」「理解困難」「未知の状況」の4つの因子を、Budner(1962)やNorton(1975)の曖昧さの分類と比較すると、本研究で抽出された4つの因子は大学生が遭遇する具体的な状況であり、因子それぞれがBudnerやNortonの示した要素を複数併せ持つと考えられる。

曖昧な状況への対処について

曖昧な状況への対処については、「放置」「周囲観察」「探索的行動化」「情報収集」「準備行動」が5つの特徴として見いだされた。

「放置」は、曖昧なことから距離をおき、向き合わない対処である。曖昧さは、一般的には不快なものであるとされるように(増田, 1998)、曖昧な状況から逃れたい思いから、放っておく対処がとられると予想される。また、不快感から逃れたいために放置するのではなく、割り切って取ってそのままにするとか不快感がないためにそのままにしておける可能性もある。

「周囲観察」は、曖昧な状況に対し直接的に何か働きかけるわけではないが、周囲を観察することで自分がどうするべきかについて手がかりを得るための対処であると考えられる。曖昧さは、「十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態(Budner, 1962)」であるため、自分がどう動くかへの迷いに対する問題解決の最初のステップとなりうる間接的な対処と推察される。

「情報収集」は、自ら情報を集めるような行動である。「周囲観察」とは異なり、観察するだけでなく自分で行動して情報を求めたり確認したりする対処である。「周囲観察」は自分がどうすべきかの手がかりをつかむための対処であるのに対し、「情報収集」は曖昧な状況を整理し理解するための対処であると考えられる。

「探索的行動化」は、曖昧な状況に対して、躊躇せずとりあえずの一步を踏み出そうとする対処であるといえる。これは、曖昧な状況に対して何か行動することに価値を置き、意味を見出していると考えられる。曖昧さに寛容すぎると、不確かな状況にとどまりそれを解決することを避けてしまうとされているが(Litman, 2010)、探索的に第一歩を踏み出すような行動は、曖昧さを受け入れる、受け入れないという次元ではなく、行動したことで自分自身が納得することや居心地の良さにつながると考えられる。

「準備行動」は、曖昧さに備えるような行動である。「探索的行動化」とは違い、様々な状況を考慮してから行動をおこす対処であるといえる。増田(1998)がいうように、曖昧な状

況では事態の正確な予測が困難となる。そのため、様々な可能性を考慮しできることをしておきたいというように準備行動がとられると考えられる。

本研究で見いだされた曖昧さへの対処のうち、「放置」は曖昧さに対処しないという対処であり、それ以外の「周囲観察」「情報収集」「探索的行動化」「準備行動」は、曖昧さに対して何らかの働きかけをする対処であるといえる。「探索的行動化」が曖昧な状況に対し何か行動を起こす対処であるのに対し、「周囲観察」「情報収集」「準備行動」は直接的に働きかける対処ではない。どのような直接的対処をするか決めるために、状況を判断したり確認する段階であり、一度立ち止まって冷静になるような行動であるといえる。つまり、曖昧さへの間接的なアプローチであると考えられる。

曖昧な状況への寛容、曖昧さへの態度、曖昧な状況への対処、適応感の関連について

曖昧な状況への寛容、曖昧さへの態度、曖昧な状況への対処、適応感の関係について、Figure1の仮説モデルをもとに、潜在変数を導入して分析を行ったところ Figure2のモデルが得られた。仮説モデルの通り、曖昧な状況への寛容から曖昧さへの態度、曖昧さへの態度から曖昧な状況への対処、曖昧な状況への対処から適応感というように影響していた。「返答待ち」と「未知の状況」に寛容であることが「曖昧さの受け止め」を促進させ、「曖昧さの受け止め」が「間接的アプローチ」を導き、「適応感」を向上させることが示された。また、曖昧さへの「不安」は、「探索的行動化」を抑制するが、「未知の状況」に寛容であることは、曖昧さへの「不安」を抑制し、「間接的アプローチ」を促進することで、「適応感」を向上させることが示された。

まず、返答待ちという曖昧な状況に寛容であることが、曖昧さをそのまま認めて受け入れられる態度である「受容」、曖昧さを魅力的なものと評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向である「享受」から構成される「曖昧さの受け止め」を促進させることが示された。返答待ちという不確実性を伴った状況への寛容さが、曖昧さをただ受け止めるだけではなく、曖昧さを魅力的なものとして肯定的に認知していく態度も促進するといえる。一方、未知の状況に寛容であることは、「曖昧さの受け止め」を促進させ、曖昧さへの「不安」を抑制することが示唆された。つまり、手がかりのない新しい状況に寛容であることは、曖昧さに対し混乱や対処の難しさを感じることを抑制し、曖昧さを認めて受け入れたら、魅力的なものとして認知する態度が促進されると考えられる。

このように、「返答待ち」「未知の状況」への寛容さが、どちらも曖昧さへの「受容」「享受」の態度を促進させることが示された。「受容」や「享受」といった曖昧さへの態度は、場面の特定性を排除した、全般的な曖昧さへの反応傾向である(西村, 2007)。本研究は、大学生を対象としており、大学生が具体的に曖昧だと感じる状況を許容できるということが、自身が意識する曖昧さへの態度に影響すると考えられる。

次に、曖昧さの「受容」「享受」といった「曖昧さの受け止め」は「周囲観察」「準備行動」「情報収集」からなる「間接的アプローチ」を導くことが示唆された。曖昧さの「受容」は曖昧さをそのまま認める認知とニュートラルな感情が伴われる。一方、曖昧さの「享受」は曖昧さを肯定的に評価する認知と嬉しさや面白さといった感情が含まれる。それらが、自分ができる準備をしたり、周囲を観察したり、曖昧さへの情報を得るといった行動を導くことになる。これらの行動は、曖昧さに対してできることを冷静にするといった間接的な対処で

あるとも考えられる。しかし、「曖昧さの受け止め」から、「探索的行動化」にはパスが引けなかった。その理由として、「曖昧さへの耐性が高い、もしくは高すぎることは、曖昧さを減少させようという動機が欠如し、曖昧さに対して実際的な行動がとれない」（吉川,1980）ことがあげられる。つまり、曖昧さに寛容であることが、曖昧な状況に対する実際的な対処を抑制することが考えられる。しかし、曖昧さへの寛容が実際的な対処は導かないとしても、間接的な対処を導く可能性が本研究では示唆された。さらに、曖昧な状況への対処である「放置」はモデルに入らなかった。「曖昧さの受け止め」が導くのが「放置」ではなく「間接的アプローチ」である理由として、以下のことが推察される。仮に曖昧さに対し寛容すぎる場合は曖昧さに無関心である可能性があり、吉川(1980)や Litman(2010)の述べるように、放置するとか行動を全くとらないことにつながる。しかし、「受容」や「享受」は曖昧さをニュートラルかそれ以上に評価し受け止める態度である。よって曖昧さに向き合わないのではなく、冷静に曖昧な状況に対し直接的な対処を決めるための間接的な働きかけを導くことが可能になると考えられる。

一方、曖昧さへの「不安」は、「探索的行動化」を抑制することが示唆された。曖昧さに不安を感じると、曖昧さに対し何らかの行動を起こすことが難しくなる。しかし、曖昧さに非寛容な者は寛容な者に比べ、衝動的で短絡的な性質を持ち(吉川, 1986)、解決法を一刻も早く実行に移したいという欲求から直接的な対処をするという報告がされている(友野・橋本, 2002)。これらの先行研究の知見と本研究の結果は一見矛盾しているように思えるが、「探索的行動化」と衝動的に直接的な対処をすることとは異なると考える。「探索的行動化」は行動を起こすことに価値を置き、ためらわずにアクションを起こす対処であり、曖昧さから抜け出したために衝動的に行動することと同じではない。しかし、曖昧さへの「不安」が「間接的アプローチ」を導くことから、曖昧さへの混乱や対処の難しさを感じながらも、直接的な対処の前段階としてできることを冷静にするといった対処がとれる可能性が示された。

加えて、「間接的アプローチ」と「探索的行動化」がどちらも「適応感」を高めることが示された。とりあえず行動を起こすことや、間接的ではあっても自分ができていることをすることが、信頼されている感覚や受け入れられている感覚、居心地の良さを高めると考えられる。ただし、「放置」が適応感を促進することは示されなかった。それは、「回避的対処は心理的ストレス症状と正の相関があり、接近的対処は負の相関関係にある」（Folkman, Lazarus, Gruen, & DeLongis, 1986）という知見から裏付けられる。したがって、曖昧な状況に対してそのまま放置・回避するのではなく、間接的ではあっても今ここで自分ができている対処をすることや、とりあえずの第一歩の行動によって自分が納得することにより、適応感が高められると考えられる。

VI. 総合考察

本研究では、曖昧な状況と曖昧な状況への対処のあり方を整理し、曖昧な状況への寛容から曖昧さへの態度へ及ぼす影響、そして、曖昧さへの態度から対処へ、対処から適応感に及ぼす影響について仮設モデルを用いて検討を行った。その結果、返答待ちと未知の状況に寛容であることが曖昧さの受け止めを促進し、曖昧さの受け止めが間接的アプローチを導き、適応感を向上させることが示された。また、曖昧さへの不安は、探索的行動化を抑制するが、

未知の状況に寛容であることは曖昧さへの不安を抑制し、間接的アプローチを促進することで適応感を向上させることが示された。

曖昧だと感じる具体的な状況に寛容であるということが、自身が認知する曖昧さへの寛容さや魅力的な評価を促進する可能性が考えられる。このように、曖昧さを受け止められることが、周囲を観察し、準備行動を起こし、情報収集をするという対処につながり適応感を高めるといえる。これらの対処は曖昧さに対する直接的ではなく間接的な対処であると捉えられる。特に、曖昧な状況に不安を感じ行動をおこすことにためらう場合、間接的であっても自分ができることをするという冷静な対処をとることが状況に適応するためには効果的であるといえる。また、曖昧さへの不安が間接的な対処を可能にし、それが適応感を向上させることから、不安を感じることをネガティブに考える必要はなく、その不安感情を活用し適応感を促進する対処につなげることはできるといえよう。

さらに、認知行動療法では、「認知」「感情」「行動」「生理」の一つが変化すれば、ほかの要素にも変化がもたらされると考えるため(Neenan&Dryden,2004)、行動を変化させることで、曖昧さへの感情も変化し、それが認知に影響を与え適応感を高める可能性が考えられる。曖昧な状況というのは避けて通ることはできない。その曖昧さを放置せずに、間接的アプローチや探索的行動化といった対処のうち実行できるものから取りかかることが重要である。

最後に、本研究の限界と課題について述べる。本研究は大学生を対象とした検討であるため、対象者の年齢が変われば曖昧さへの態度や対処が変化する可能性がある。また、本研究では、曖昧さへの態度や対処について男女別のモデルは提示していない。今後は調査対象者の数を増やし、性差や年齢差を考慮した検討が求められる。さらに、曖昧な状況の中で問題が生起する対人関係に焦点を当てた曖昧さに対する対処と適応感や精神的健康との関連について検討することが必要である。

【引用文献】

- Budner,S.(1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- Curwen, B., Palmer, P.,& Ruddell, P.(2000). *Brief Cognitive Behaviour Therapy*. SAGE Publications (下山 晴彦(訳)(2004). 認知行動療法入門 短期療法の観点から 金剛出版)
- Folkman, S., Lazarus, R. S., Gruen, R. J., & Delongis, A.(1986). Appraisal coping, health status, and psychological symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 571-579.
- 今川 民雄(1981). Ambiguity Tolerance Scale の構成(1)—項目分析と信頼性について— 北海道教育大学紀要, 第一部 C, 教育科学編, 32, 79-93.
- Janis, I. L.(1971). *Stress and frustration*. New York: Harcourt Brace and Jovanovich. (秋山 俊夫(訳)(1984). ストレスと欲求不満—こころの健康のために— 北大路書房)
- 川喜田 二郎(1986). KJ 法—混沌をして語らしめる— 中央公論社
- Litman, J.(2010). Relationships between measures of I- and D-type curiosity, ambiguity tolerance, and need for closure: An initial test of the wanting-liking model of

- information-seeking. *Personality and Individual Differences* 48,397-402.
- 増田 真也(1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学芸術), 47, 151-163.
- 中嶋 史織・奥野 雅子(2020). 曖昧さへの態度が適応感に与える影響 現代行動科学会誌, 36, 33-42.
- Neenan, M. & Dryden, W.(2004). *Cognitive Therapy 100 Key Points & Techniques*. New York: Brunner-Routledge. (石垣 琢磨・丹野 義彦(監訳)(2010). 認知行動療法 100のポイント 金剛出版)
- 西村 佐彩子(2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討——曖昧性耐性との比較を通して—— パーソナリティ研究, 15, 183-194.
- 西村 佐彩子・北山 修(2001). メタファー理解における文脈生成とあいまい性耐性の影響について 九州大学心理学研究, 2, 107-116.
- Norton, R.(1975). Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*, 39, 607-619.
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み——個人-環境の適合性の視点から—— パーソナリティ研究, 12(1), 38-39.
- 友野 隆成(2010). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容と特性的対人ストレスコーピングおよび精神的健康の関連性 社会心理学研究, 25, 221-226.
- 友野 隆成・橋本 宰(2002). あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響 性格心理学研究, 11, 24-34.
- 友野 隆成・橋本 宰(2005). 抑うつ素質-ストレス・モデルにおける性差の検討——対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として—— 健康心理学研究, 18, 16-24.
- 植村 善太郎(2001). あいまいさへの耐性と集団同一性が新入成員への寛容的反応に及ぼす効果 性格心理学研究, 10, 27-34.
- Watzlawick, P., Bavelas, J., & Jackson, D. D. (1967). *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York: W. W. Norton & Company. (山本 和郎(監訳)(1998). 人間コミュニケーションの語用論——相互作用パターン、病理とパラドックスの研究——. 二弊社)
- 米田 晃久(2012). *Tolerance of Ambiguity* 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連——異文化接触場面を中心として—— 平成24年度神戸大学大学院国際文化学研究科博士論文 (未公開)
- 吉川 茂(1980). Ambiguity Tolerance の程度と適応性 関西学院大学教育学科研究年報, 6, 35-39.
- 吉川 茂(1986). 曖昧さへのトレランス-イントレランスの基本的相違点に関する研究 関西学院大学人文論究, 35, 94-121.